

徳富蘇峰記念館

目録 — (15)

蘇峰宛女性の手紙展

展示期間◇平成十年一月五日～十二月二十一日

はじめに

蘇峰に寄せられた女性の手紙は、いったいどれほどあるのか。人名辞書に記載されているような女性は、これまでに「先覚女性」として幾度か展示した。今回は著名な女性と言う枠を払って、心惹かれる女性たちの手紙を展示した。女性が八十一通、男性が三十七通、全体で百十八通の展示である。

当館の書簡総数が約四万六千百通、差出人一万二千人。その中で女性の手紙は約二千五百九十通、差出人五百九十人。計算すると女性の手紙は全体数の一八%、差出人数の二〇%になる。全書簡の約二割弱が女性の手紙ということになる。さて女性の手紙展なのに、どうして男性の書簡も展示したのか。それは著名な女性でなければ、一氏の妻という形で紹介されることが多く、女性の生没年を調べるのはかなり難しい。今回の展示は妻を紹介するために夫の出番となったケースが多い。たとえば鳥居きみ子は考古学者で有名な鳥居龍蔵の夫人である。きみ子が子供連れで蒙古に行ったことは書簡に書いてあったが、母として、女性としての観察で蒙古をとらえ、立派な大冊「土俗学上より観たる蒙古」を出版したことは、当館の書棚にそれを見出し、その面白さにびびりしてわかったことである。「日本基督教婦人矯風会」にしても、植木枝盛・徳富蘇峰・内村鑑三・嶋田三郎など、話の面白い講演者が必要であった。

百十八通の目録は、書いた人の生年順に並べた。書簡の内容であるが、

書評を願う人が多いのに驚いた。自著を人々に読んで欲しい気持はわかるが、自から推薦を願うのは如何なものであろうか。しかし岡本一平が妻かの子のために書評を頼んでいる素朴な文面や、中本たか子の徹底した迫力ある申し込み、平塚らいてうのスマートな願ひ方などには好感がもてた。無名の方の書簡も多く読んだ。戦争で主人や息子を亡くした方が、戦死した者の為に、尊敬していた先生の揮毫を飾りたいという文面が多かった。その様な中で、大山セイという母親の手紙が目をついた。達筆ではないが一字一字丁寧に書かれ、発信は昭和十七年一月二十五日、福岡からである。内容は、私は上海で戦死した故海軍大尉大山勇夫の母で、勇夫の日記を読むと先生は日本文化の恩人とも書いてある。東京市も菓子が少ないと聞いたので、勇夫も大そう好きであった菓子を送った。これだけの文章であるが、他の書簡と何かが違っていた。蘇峰に何も求めず、遠慮がちに、息子の好きだった菓子を送る。謙虚な母親の息子への愛が伝わって来た。私はこの手紙を来館者の読みやすいところに展示した。当館の史料を閲覧に通っておられる小宮一夫先生に、大山セイさんの話をすると、これは「大山事件」の大山の母親ではないかと教えて下さり、すぐに影山好一郎氏の論文「大山事件の一考察―第二次上海事変の導火線の真相と軍令部に与えた影響―」を送って下さった。セイさんの手紙を読んだ時に、私は芥川龍之介の短編「ハンカチ」を思い出した。四十年前も前のことで、正確でないが、息子の戦死を報告にきた母親が、涙をみせず淡々と話すのを聞いていた主人公が、ふとテーブルの下で、ハンカチを握りしめ、震えている母親の手を見た。母親のいしれぬ深い悲しみに気づかなかった自分に愕然としたというような話だったと思う。

一通一通の書簡には、背景があり、繋がりがあり、その広がりがある。けなない次の出会いを生んできた歴史がある。恋愛も不倫も心中も、結婚も離婚も私生児も、あこがれも挫折も片思いも、入獄も出獄も自殺も、子を亡くした苦しきも、痛さもある。今回の展示書簡は、テーマで選んだ書簡でなく、女性の手紙が目となった台風のような展示である。ここまで歩んで来た自己の存在が、展示書簡の誰に共鳴するか、女性を支援した男性もふくめて、女性の手紙を見ていただきたい。また美しい筆跡を堪能していただきたい。今回の初展示書簡は百十八通のうち七十五通である。

絵画は平福百穂の「椿の屏風」「白梅」「五松二峰」。福田眉仙の「富士と梅」「鶴」「晚晴草堂」。齊白石の「海老」。蘇峰の「敬天愛人」屏風。

一九九八年展示書簡一覽

①横井小楠 一八〇九～一八六九(文化六～明治二) 60歳 熊本県

幕末・維新期の政治家 家塾を開き 実学党を結成 開国通商、殖産興業による富国強兵を主張 明治二年 耶蘇教徒・共和的思想の持ち主として 保守派により京都寺町で暗殺された 徳富一敬は小楠の高弟 徳富家の皆が横井小楠・勝海舟・新島襄を敬愛していた 蘇峰は小楠の影響を父一敬を通して受けていた

*小楠の揮毫 軸仕立て

人心惟危、道心惟微、惟精惟一、允執厥中

(詩意) 現今人心は安定を欠き、道徳心も薄れているが、人間として大切なことは中庸を守るといふこととだけである。

②徳富一敬(淇水) 一八二二～一九一四(文政五～大正三) 92歳 熊本県

漢学者 蘇峰の父 横井小楠の弟子

*明治三十年五月九日付 ロンドン宛

深井氏代筆の手紙で病氣のことを知り驚く。当地は家もでき、植木も新芽を出している。五十日の内には積る珍話を承ろうと皆々楽しみにしている。(要約)

③竹崎順子 一八二五～一九〇五(文政八～明治三八) 80歳 熊本県

熊本女学校長 蘇峰の母方矢鳥家の叔母 優しく誉める教育をモットーとした 徳富蘆花著『竹崎順子』あり

*明治二十九年五月二十日付

外遊出立を馬関から見送る。先々からの御報楽しみにしている。(要約)

④徳富久子 一八二九～一九一九(文政二～大正八) 90歳 熊本県

蘇峰の母 基督教が一夫一婦を重んじること賛同し 洗礼を受ける眼病で病弱であったが 姉の竹崎順子、妹の横井津世子・矢鳥楯子の社会的活動の精神的支えとなった 女性も手に職を持つことをモットーとし

た女子教育を実行した 一家をあげて九州から上京した明治十九年時を同じく東京婦人矯風会が創設され 嫁静子と共に会員になった
*明治二十二年七月十八日付 京都の新島襄宛
大久保真次郎夫婦が京都で世話になった。(要約)

⑤横井津世子 一八三一～一八九四(天保二～明治二七) 63歳 熊本県

横井小楠の後妻 牧師・教育家・政治家である横井時雄(一八五七～一九二八)の母 蘇峰の母方の叔母

*明治二十二年二月十一日付

時雄からも手紙がきた(要約)

⑥矢島楯子 一八三三～一九二五(天保四～大正一四) 92歳 熊本県

女子教育者 竹崎順子、徳富久子、横井津世子の妹 酒乱の夫と結婚十年後に別れ 明治五年 上京 教員伝習所に学ぶ 新栄・桜井女学校の合併により女子学院の院長に就任 明治十九年 東京婦人矯風会を創立 長く会長を勤め 禁酒・廃娼運動を続けた

*明治()八月二十一日付

八月三十一日から一週、間横浜のフェリス学校に於て第二回夏期学校を開設するにつき、大変だろが九月六日午後四時に何とか演説してほしい。(要約)

⑦跡見花隠 一八四〇～一九二六(天保一一～大正一五) 86歳 大阪

女子教育者 幼時から和漢学に秀で 寺子屋を営む父親を助けた 明治三年 上京 跡見女学校創立 和歌、習字、絵画など伝統的教養の育成を重んじた

*明治四十四年十月六日付

御尊父様の九十歳の記念の硯ありがたい(要約)

⑧田中正造 一八四一～一九二三(天保二二～大正二) 72歳 栃木県

衆議院議員 社会運動家 足尾銅山鉱毒問題解決を帝国議會で追求し 天皇への直訴を試みた 農民と共に戦い 葬儀には五万余の農民が参加

した

*明治三十四年九月十三日付

治安妨害の旨驚いた 国民新聞が発行停止になったのは、平生より貴新聞が正論を主張しているから 貴社のいつもながらの痛言を喜ぶ(要約)

⑨新島 襄 一八四三〜一八九〇(天保一四〜明治二三) 47歳 群馬県

キリスト教の代表的教育者 アマリスト大、アンドパー神学校卒 一八六四年(元治一年)密出国してアメリカに渡り 十年間滞在 明治八年京都に同志社英学校 明治十年 同志社女学校を創立 第一回卒業生に小崎弘道、横井時雄、海老名弾正らがいる

*明治二十二年六月二十二日付

小生の生死もひとえに天父の手裏にある 人間栄枯の如きは喜ぶにも足らず 又悲しむにも及ばず 身を自然にゆだね 魂を天父にまかせて大歓楽となす 小生も平素多病であるから 今より活眼を開らき 小生の後任を注目しておく 後任者指名の義は小生より優れたメンタマを具有している貴兄の御意見にお任せするので お引き受けください(要約)

⑩潮田 千勢子 一八四四〜一九〇三(弘化一〜明治三六) 59歳 長野県

婦人運動家 飯田藩の藩医丸山龍眼の二女 潮田健次郎に嫁し三男二女の母となる 四十歳の時夫が病没 子供の教育のために明治十七年上京 明治十九年 東京婦人矯風会に入会 矢島楯子、佐々城豊寿らと禁酒・廃娼運動を展開 早くから足尾銅山鉍毒問題に取り組んだ 矯風会第二代会頭 長男伝五郎は優秀な青年で 明治天皇が大学に行幸のおり電氣学を進講して「能くわかりたり」と賞め言葉をいただいた 福沢諭吉の五女光子と結婚したが 早世した 千勢子の孫 潮田江次氏は後に慶應義塾大学の塾長(一九四七〜一九五六)を勤めた

*明治二十二年七月二十三日 潮田千勢、佐々城豊寿連名 封筒なし 筆跡は豊寿

築地五番館に於いて「男女親友親睦会」を開く 暑いけれどご出席下されば面目がたつ 植木君も出席

*明治(二十二)年十一月二十三日 婦人白標倶楽部有志

「国民新聞」過日来発行停止のよし 畢竟国事多端の時機に際し 邦家の為かつ我々人類を愛する御熱情の止まる処を得ずためであらう 万々遺憾の至り 御開停になって 例の卓説拝読の榮を得んことを渴望している 就いてはお慰めの印として鶏卵一箱御笑下されば大慶

⑪新島 八重子 一八四五〜一九三二(弘化二〜昭和七) 87歳 福島県

女紅場、京都府女学校の教師 山本覚馬の妹 戊辰戦争の会津若松の戦で銃を持ち 男装で戦かった 明治九年 新島襄と再婚 夫と共にキリスト教の伝道につとめた 蘇峰は同志社在学中 八重を「ぬえ」と言つて嫌つていたが 襄亡きあととは終生親切にした 蘇峰が親の決めた平凡な嫁がよいと思うようになったのは 両親一敬と久子並びに 新島先生と八重子夫人の關係を見て 手強い妻は持ちたくないと思つたからという

*明治二十三年三月五日付 黒粹の封筒使用

亡夫生前より死後にいたるご親切、筆にいいあらわせない

*大正十二年十二月二十一日付 京都市寺町通より

かぞえて八十歳になる。私のいちごを作っている処まで私に相談なくどうかしている。同志社に全部寄付をした私の精神は地所を切り売りすることではない。今しばらく此のままにしておいてほしい。何だか情けない。お前様(蘇峰)は如何思ふかとお相談する。(要約)

⑫本多 庸一 一八四八〜一九二二(嘉永一〜明治四五) 64歳 青森県

キリスト教指導者 藩命で横浜に留学中キリスト教に出会う 弘前公堂を設立 青山学院を創立し初代院長に就任 明治四十年 日本メソジスト教会の初代監督 日露戦争では主戦論を唱えた

*明治(四十四)年五月十日付

講演倶楽部を組織した藤原俊雄君を紹介する。(要約)

⑬湯浅 治郎 一八五〇—一九三二（嘉永一三—昭和七）82歳 群馬県

キリスト教社会事業家 詩人湯浅半月の兄 蘇峰の姉初子と再婚 新島襄の影響でキリスト教に入信 安中教会を創立 群馬県議会議長として公娼廃止案を提出 民友社の創設時は蘇峰の経済的協力者となる

*明治十八年五月二日付 肥後大江村の蘇峰宛

海老名夫妻のご紹介で、親しく貴姉初子姉に接し生涯を共にする契約をいたした。（要約）

⑭松本 萩江 一八五一—一八九九（嘉永四—明治三二）48歳 埼玉県

日本基督教婦人矯風会の理事

*明治二十八年二月一日付 広島の蘇峰宛 神戸より

過日神戸を御通りになりました由、お寄りいただけなく遺憾の至りです。神戸婦人報会も追々成長いたしている 播州にも支部を設けるまでに相運んでいる 充分に目的を達することができるようになると一同喜んで 帽子制作の事此は非常に時間がかかる 十二月二十八日より広島へ参りて、一月八日に種々の手数を尽くして 漸く西三日の中に七百個に至り十日頃までには千個を御送りする。石黒先生へ宜しく御願う。わが国今日は万事万端進歩の運に向つている。婦人の知識、道徳にいたつては（ある部分をのぞきては）大に向上。本会の目的は病者復帰の爲にと相定めている。これらの事情も御帰路に伺いたい。何卒石黒先生によりしく（要約）

⑮嶋田 三郎 一八五二—一九二二（嘉永五—大正一一）71歳 静岡県

政治家・ジャーナリスト 大蔵省付属英学校で学ぶ 「横浜毎日新聞」

主筆をへて文部大書記官となる 足尾銅山鉾毒事件・娼娼運動など中広い活動をした 雄弁で有名 矯風会の講演ではよく講じた

*明治（二十）年三月七日付

あいかわらず日々事に逐はれ、拙稿未だ差出さず。明日夕には少閑を得、明後朝迄には御手許へ差出す。平民社会之責任と申す題に御定め下されたい。（要約）

⑯佐々城 豊寿 一八五三—一九〇一（嘉永六—明治三四）48歳 宮城県

婦人運動家 明治十九年 東京婦人矯風会結成に際しては矢島楳子と共に活躍 書記（副会頭）となる 政治に関心を寄せ 矯風会内に「婦人

白標俱樂部」を創設 婦人の議会傍聴権を獲得 明治二十三年十二月十七日 新島八重未亡人と国会を傍聴 また豊寿は婦人の財産権を主張し

内村鑑三に非難された 明治二十六年 北海道開拓を女性で最初に実行した 娘信子と国木田独歩の恋愛結婚に反対 蘇峰が仲人となる 夫

佐々城本支は医者 「東京婦人矯風雑誌」（明治二十一年四月）を創刊 また植木枝盛の「東洋之婦女」の出版人となる

*明治二十五年三月三日

植木君の遠逝は百人の政治家を失うより惜しい。女権拡張の道止まりたるように感じる。

*明治二十七年一月二十一日 北海道東紋別より、北海道の寒さ、風俗、人々の様子、村の構成などを伝えた、二千八百字の野紙四枚に書かれた手紙

*明治二十八年十月十四日付 「国木田一件」と封筒表に蘇峰の朱字書き込みあり

哲夫（独歩）からの手紙が座敷に落ちていたので、主人と読んだが、その文中に近日是非密会したいとあり、主人が怒った。もう一度ご考慮を

煩わしたい。この書一読のうえ火中に（要約）

⑰下田 歌子 一八五四—一九三六（安政一—昭和十一）82歳 岐阜県

女子教育者 幼少から漢字和歌を学び 明治五年 宮中女官となる 華

族女学校の設立に参加 学監、教授を勤める 明治三十一年 帝國婦人協会を設立 大衆女性のための実践学園の校長を勤めた 「歌子」という

名は歌才を賞でて皇后からいただいた名 明治の紫式部といわれた日本

本の学校教育に初めて体育を採り入れた

*明治三十三年十二月十三日付

お嬢さま一日もはやくご入学のように、何分欠員なし。第一にご身体の義、第二は学業の義、習ったことを無理のない程度にそらんじておくと。（要約）

⑮横井玉子 一八五五～一九〇三(安政二)明治三五) 48歳 熊本県

女子教育者 横井小楠の甥佐平太と結婚 夫と死別後 新栄女学校女子学院で裁縫や洋画などを教える 明治三十三年 女子美術学校の設立に中心となり活躍 隆子ともいう

*明治()年四月二十二日付 蘇峰が書面で頼んだことへの返書 書簡中に「縁談」「候補者」などがでてくるが 達筆で読めず

⑯ハンナ・リデル 一八五五～一九三二(安政二)昭和七) 77歳 イギリス

明治二十二年 キリスト教宣教師として来朝し たまたま熊本の本妙寺に集まっていたハンセン患者を見てその救済を決意 明治二十八年にハンセン病のための回春病院を熊本に開設 ハンセン患者から母のように慕われた 当時の新聞での飛松甚吾談によると、「リデル嬢は日本の軍艦一雙の建造費さえあれば、今後三十年間に日本からハンセン病患者を全滅させることが出来ると断言し確信していた」という

*大正五年二月十七日付 熊本より

私たちの地方の名物の一つである小さな錫製のお皿を、手紙と共に送りましたのでお受け取り下さい。あなたの影響により、私たちの病院が授かることのできた、すばらしい援助に対しての感謝の気持です。ご存知のように私の古く、大切な友人である岩井さんが亡くなりました。彼はいつも賢明で大変協力的でしたので淋しく思いますが、日本での生活の中でこんなに素晴らしい友人に巡り合えたことを嬉しく思います。

(全文) 宮崎松代訳

⑰飛松甚吾 一八八三～一九四五(明治一六)昭和二〇) 65歳 大分県

ハンナ・リデルの二十年間の秘書 大正四年頃 熊本に来て 恩師より紹介された回春病院で働き 病院の事務一切を担当した またハンナ・リデルの秘書として 病院経営の苦勞を共にした リデルの死後二年目の昭和九年『ミス・ハンナ・リデル伝』を出版した

*昭和九年九月二十二日付

故ミス・リデル伝編纂に就き無理を申し上げましたが、お忙しいにも拘わらず結構なる御題辭を賜はり、有り難く拝受しました。これでミス・

リデル伝が無上の光彩と栄光を戴きました。ミス・リデルに対する先生のご厚情に唯々感激しています。(要約)

⑱海老名 弾正 一八五六～一九三七(安政三)昭和一二) 81歳 福岡県

キリスト教の代表的指導者 熊本洋学校、同志社卒 新島襄の門下 明治十二年 群馬県安中教会を設立しその牧師となる 明治三十三年雑誌「新人」を創刊 その門下から吉野作造、内ヶ崎作三郎らが出た 大正九年 同志社大総長

*明治四十二年八月三十日付

昨日御配慮致候吉野作造氏を 御紹介致置候。幸いに御面談し下され御厚情のほどありがたい。(要約)

⑳海老名 みや

海老名弾正夫人 東京婦人矯風会發起人の一人 横井小楠の娘 熊本洋学校で蘇峰の姉初子と共に学ぶ

*昭和十五年五月二十八日付 猪一郎・静子宛

実は先夜千代子女史と山室中将の記念御講演を承り其人に対する深い御同情と公平なる御批判とは流石にと満堂の人々をして感動させたようです。遺族の方々にとつてはさぞかし御満足なことと、感謝の情に堪えませんでした。先日河井みち子女史も非常に感動し、殊にあの平民の福民に対する御弁好は先生ならでは言ひ得ぬことだと感謝して居られました。次第次第に置き去りにされつつある私共は、御同様心淋しく感じます。去る二十二日は主人の三回忌。若しご都合およろしければ御来会願上ます。(要約)



⑳小崎 弘道 一八五六～一九三九(安政三)昭和(一四) 83歳 熊本県

キリスト教指導者 牧師 同志社総長 明治十二年に上京 「六合雜誌」
創刊に参加 豊南坂教会設立 新島襄臨終の床に蘇峰と同席した

*明治(二十)年七月十二日付

板垣退助が爵位を受けることを辞する様子はないようだ。同氏とは別懇
の交際がある大兄が何で同氏のために一言せざるか。はじめより断然爵
を辞するの決心がないのなら致し方ないが、一片の老婆心止むをえず一
言以て大兄の注意を捉す。(要約)

㉑大久保 真次郎 一八五六～一九一四(安政三)大正(三) 58歳 熊本県

蘇峰の姉音羽子の夫 久布白落実の父 熊本医学校で学び 北里柴三郎
と共に選ばれ東大医学部に進むのち牧師となりアメリカで伝道 東本
願寺の学僧小栗憲一のもとに食客として入り込んでいたこともあるい
ろいろと職業をかえ 同志社にも蘇峰在学中 入学してきたという 蘇峰
の姉音羽子と結婚したいきさつは今のところわからない 蘇峰は音羽子
姉に一生お小遣をあげていたという

*明治二十九年八月二十八日付 ウイーンの蘇峰へ 政治、留守宅の様
子等 長文

常に御健康にして御大食の由、御芽出度たい。世の中は何が幸ひとなる
やも計り難く、去月十六日僅かに数日の病にて長男真太郎永眠、小生も
春インフルエンザに罹りてより元氣十分ならざるに加へて看病勞にて大
に健康を傷け候間、思い切つて音羽、落実引連れ則拳返子に海水浴と出
かけ候。(要約)

㉒植木 枝盛 一八五七～一八九二(安政四)明治(二五) 35歳 高知県

自由民権思想家 婦人問題に關して先駆的な発言をおこなう 明治二十
一年一月高知県会に公娼廃止建議を提出し 可決させたことから 東京
婦人矯風会と交流が始まった 明治二十一年十一月に蘇峰に送られた
「東洋之婦女」の目次に「男女の同権・婦女の参政権・男女同権の利」
のことが書かれていることから 植木が女性の権利に積極的であった
ことがわかる

*明治二十一年十一月二十二日付 大阪東区より

「東洋之婦女」の原稿送った。女学雑誌から出版してほしいので、相談
をしてほしい。序文を書いた諸女子は各地で相応に聞こえたる者で大半
は基督信者である。(要約)

㉓成瀬 仁蔵 一八五八～一九一九(安政五)大正(八) 61歳 山口県

女子教育家 明治十年キリスト教に入信 大阪梅花女学校教員となる
明治二十三年アメリカに留学 女子教育を三年余研究 明治三十四年東
京に日本女子大を設立 キリスト教と武士道的精神とを基調とする女子
教育論を説いた

*明治四十年九月十四日付

お忙しいと推察致しますが、来る二十一日(金曜)三時ごろ御来臨くだ
さい。追伸 同日は生徒の調理にかかる夕飯を差し上げたいので、御来
臨有無をお知らせください。(要約)

㉔大久保 音羽子 一八五八?不明 熊本県

蘇峰の姉 大久保真次郎と結婚 久布白落実の母

*大正十二月五日十二日付 徳富静子宛

過日はご馳走さまでしたいろいろの名物をおみやげにいただき、御礼
申し上げます。皆々様お嬢様方にも御旅行、かげながら私までも嬉しく
存じ上げます。過日お願ひ申しました御書、(蘇峰に)お書き願ひたい。
御自愛御専一に祈り上げます。女中さんにもよろしく(要約)

㉕湯浅 初 一八六〇～一九三五(安政七)昭和(一〇) 76歳 熊本県

蘇峰の姉 同志社女学校で英語を学ぶ 婦人矯風会会員 湯浅治郎の後
妻 群馬県で明治二十六年娼妓が断行されたのは 新島襄に師事した湯
浅治郎と叔母矢鳥楯子の薫陶を受けた初子の影響が大きい

*昭和六年四月二十三日付

御退院後は如何、御機嫌よくおすごしですか。先頃お願い申上げた詩稿
ご多忙の処申し訳ないが御一覽頂きたい。主人より宜しく申している。
(要約)

⑲内村鑑三 一八六一—一九三〇(文久一—昭和五) 69歳 東京

キリスト教伝道者 思想家 札幌農学校卒 新島襄の紹介でアマースト大学に留学 明治二十四年第一高等中学校で不敬事件を起こし退職 日清戦争のときは主戦論を唱えた 日清戦争の正当性を示す為民友社から英文で本を出したいと蘇峰に頼みすぐに実行された

*大正十三年九月二十日付 蘇峰の次男万熊の急逝に対して

国民新聞紙上にてご不幸の由承り、御同情に堪えない。親が子を失うの悲痛は人生最大の悲しみである。御両親様の御心中幾重にも御推察申し上げる。小生も十二年前に推独りの娘を失ひその痛さは今日尚新しき傷として残っている。然しながら此の傷によりて天国の門は開かれ、神の愛は一層深く励まされ、同胞のために尽くさんとするの心は一層深く励まされた。(要約)

⑳鳩山春子 一八六三—一九三八(文久三—昭和一三) 75歳 長野県

女子教育者 女子師範学校卒 明治十四年鳩山和夫と結婚 共立女子職業学校の設立に参与 後校長に就任 社会事業にも活躍

*昭和十一年一月十八日付

ご懇篤なるお言葉頂戴し光栄、深く感謝。(要約)

㉑徳富蘇峰 一八六三—一九五七(文久三—昭和三二) 94歳 熊本県

評論家 ジャーナリスト 言論人 歴史家 新島襄にキリスト教の感化を受ける 同志社中退 明治十五年大江義塾を創立 明治十九年上京 『将来之日本』を刊行し文名を高める 民友社を創設 「国民之友」「国民新聞」を創刊 大正七年『近世日本国民史』を書きはじめ 昭和二十七年まで全百巻の大事業となる 昭和十七年大日本言論報国の会長となり 戦後戦犯となる 当記念館に蘇峰宛四万六千通の書簡が保存されている

*明治二十一年五月九日付 新島襄宛 赤字

陸奥氏の周旋で鹿鳴館において陸奥氏の送別会をすることが具体的にになった。費用は二円か三円迄ぐらい。鹿鳴館は少々高価だが選んだのは陸奥氏である。新島先生はテンポランスの人なれば、陸奥氏が乾杯をしな

いでくれれば大幸といっておいた。招待の人名は、渋沢、井上、野村、青木、三好、陸奥氏。右招待状は、先生のお名前にて湯浅君と相談の上それぞれ出しておく、御自愛を願う。(要約)

・この集まりは 陸奥氏の送別会であると同時に同志社への寄付集めの会でもあった

㉒林 歌子 一八六四—一九四六(元治一—昭和二二) 82歳 福井県

社会事業家 大阪矯風会創立 日本基督教婦人矯風会会頭 一生奉仕活動を行い 大阪のゼーン・アダムスといわれた

*大正十四年一月七日付

久布白落実女史の御一行今や船中、今月中旬に到着されますので、指折り数えて待ちます。来る十四日華族会館に於いて、純潔報國懇談会が大久保男爵、井田男爵等の発起で、有力なる婦人団体首脳者の方々を招き、婦人一般の輿論を喝起致さんと折り準備中でございます。(要約)

㉓徳富静子 一八六五—一九四八(元治二—昭和二三) 83歳 熊本県

蘇峰の父一敬の友人倉園又三の娘 蘇峰が上京している間に嫁に来ていた 平凡な女性でどこを探しても水平以上の才能は見あたらないと蘇峰は評しているが平凡に徹して個性の強い徳富家の人々のまとめ役となった 質実剛健な女性 十人の子供を生み子育てと平行して忙しい 蘇峰の来客をもてなしお手伝いさんとまちがわれるほど働いた 若いころは男一敬から四書の素読・大日本史等を学んだ 姑久子とともに東京婦人矯風会の会員となり 麻布支部の会計係を勤めた 戸籍上の名は鶴子

*明治三十年五月九日付 合衆国来港大日本領事館宛

四月六日付の手紙昨日拝見、御病床よりの御書面の字を拝見して胸を打ち、父上と顔を見合わせ驚き入った。早く面会したいが、帰り道はゆつくりの方がよいと思う。が一方、何が何でもお目もじ申し上げたく。ご両親さま、こども一同元氣。不肖なる私が幸福を受け恐れ多き事。粟つぶほどのお助けも出来ず口おしいけれど、学問なく知えなく致し方ない。しかし御両親様の非常なる御慈愛の御教訓を受け大いに学問致し、いろ

いる婦人の手本となるお話を拝聞致す事のみ楽しみ。横浜から東京に行かず、必ず直に逗子にお帰り下さい。(要約)

③入沢 達吉 一八六五—一九三八(慶応一—昭和一三) 73歳 新潟県

医学者 東大医学部卒ベルツ教授の助手をつとめ ドイツ留学後ベルツの後任となる 大正十二年から外務省対華文化事業と同仁会の仕事で中国をしばしば訪問 交流した

*大正十五年五月二十九日付

本日芳翰ありがたく拝見。また高著も拝受、御芳志忝ない。荆妻からもよろしく(要約)

④入沢 常子

入沢達吉の妻

*昭和十一年六月十九日付 速達 蘇峰の返事済みの印「ス」あり 先年家庭博覧会に最も小さい台所を作った。今回は発明協会の御依頼にて作ったものを陳列した。あつかましいお願いだが一批評していただければしあわせである。場所は特許局、陳列場、女性と発明展覧会です。時日は二十日より十日間のよし。どなた様にもおよろしく、ご代理に御覧願いたく。まずはお願いまで(要約)

⑤石井 十次 一八六五—一九一四(慶応一—大正三) 49歳 宮崎県

キリスト教社会事業家 岡山孤児院院長

*明治三十八年三月五日付 岡山市 岡山孤児院より ペン俱樂部 忙しいなか願ひ事承諾下さり、万事都合よく進行(要約)

⑥石井 たつ

石井十次の妻 岡山孤児院分院茶臼原孤児院院長 夫の志を継ぐ

*大正六年五月十四日付

孤児院創立三十記念会にご出席下さり有り難い。亡夫の真面目を社会に御紹介下され感謝にたえない。

⑧嘉悦 孝 一八六七—一九四九(慶応三—昭和二四) 82歳 熊本県

日本女子教育者 嘉悦氏房の娘 横井小楠門下の父に学ぶ 成立学会卒 明治三十六年 私立女子商業学校(後の嘉悦学園)を創立 簿記珠算など経済知識の育成を重視した

*大正十三年九月二十日付 蘇峰の次男万熊の急逝に対して

今朝の新聞涙なしには拝見出来なかつた。天のいたずらにやと御同情に堪へない。とりあへず謹んで御弔詞申し上げます。母よりもくれぐれも宜しくとの事。母もそばで大なきしている。(要約)

⑨野口 寧斎 一八六七—一九〇五(慶応三—明治三八) 38歳 長崎県

漢詩人 森春涛・槐南父子に詩を学びながら国分青崖らと交遊 明治三十六年 詩誌「百合欄」を創刊 ハンセン病に苦しみながら詩作を続け 鬼才をうたわれた 蘇峰主宰の「文学会」にも出席していた

*明治二十三年十月六日付

小病にて平臥とまでは参らねども、鬱々として消日罷在候ま、万事抛擲色々失礼に打過ぎ申候。華翰拜誦候。御一閑人の作かなり面白かる可し。平仄の誤謬だけー其他一二ヶ処ー我ま、を致して差上げ申候。(要約)

⑩野口 そ恵

野口寧斎の妹 病気の兄寧斎を助け看病し 口述筆記の助手をしていた 華族女学校の校長下田歌子は そ恵を才色両全の淑女なりと賞賛した

そ恵は夫男三郎が明治三十六年に起こした「男三郎事件」に巻き込まれ 入獄するが 半年で出獄 書簡では、結審が出るまで「国民新聞」が事件を興味本位で書きたてなかつたことに対する感謝の心を伝えている

*明治三十八年十二月二十九日付

未だ一度も御目もじは申し上ず候へ共、御高名はかねがね亡兄より聞及び居候。誠に失礼とは存じあげ候へ共、一筆申上候次第、何卒御ゆるし被下度候。扱私入檻中、種々根もなき事、諸新聞に出て候にもかかはらず、御社の御新聞に限り一向御掲載無之候ひし由、これ定めて御許様の御注意によりての事ならんと深く御厚情御礼申上候。亡兄も地下に満足致し居事と存じ居候。就ては帰宅後早速お礼旁御伺ひ申上候筈に御座候へ共、色々取りまき連居候て、あまり延引と相成候まま失礼とは存じ

あげ候へ共、右書札をもて御礼申上候。尚ほ、母よりもくれぐれ宜敷申上くれ候様申出候。末筆ながら時季がら御身御大切に被遊様ねんじあげまいらせ候。

二九日 草々

徳富様 御前に

(全文)

④徳富 蘆花 一八六八～一九二七(明治一～昭和二年) 59歳 熊本県

小説家 蘇峰の五歳下の弟 同志社中退 兄の経営する民友社に入り 翻訳・人物史・小説を発表 「国民新聞」に連載した『不如帰』が単行本として出版され好評を博す 蘇峰の紹介でロシアのトルストイを訪ね 帰国後農村に永住する 大逆事件に際し一高で「謀反論」を講演 大正二年から昭和二年まで 兄弟が絶交していたことは有名 伊香保の臨終の場にて両者和解

*明治(四十一)年八月二十三日付

ツル子を養女に仕度御割愛御出来申間敷や切望、幸に御承引下され候は、千慶万福に御座候。季のことにはあり、また当人も双親の膝下をはなれ同胞に引わかれて独田舎の叔父叔母の家に養はる、は可哀想に候得共、親になつて見たき両人の衷情御察下され何卒御承諾の程奉希候。老少なき家は全き家にあらず、而して血は終に水よりも濃く有之候。(要約)

④三宅 花圃(田辺たつ子) 一八六八～一九四三(明治一～昭和二八) 75歳 東京

歌人 小説家 明治の外交官田辺太一の娘 お茶の水女子大卒 萩の舎で樋口一葉と同門 明治二十二年『薺の鶯』を刊行 近代文学史上最初の女流作家 原稿料の高さは一葉を發憤させることになった 明治二十五年 評論家三宅雪嶺と結婚

*明治二十一年八月二十五日付 葉書

投書お送り下さり有難くお礼申し上げます 龍子(要約)

④巖谷 小波 一八七〇～一九三三(明治三～昭和八) 63歳 東京

小説家 童話作家 俳人 蘇峰主宰の「文学会」に出席 博文館の「少年世界」の主筆

*明治三十六年五月二十三日付

紅葉山人重患に罹り、付ては生等友人相謀り同氏が年来の文功を永く伝へん為、十千万堂なるものを組織し 追ては文学的社交俱樂部に致す心算。先ず第一着歩の事業として、紅葉全集発行を心算にしている。先年同氏が貴方「国民之友」の為め執筆した小説類 この際同集中に編入複製したく宜しく(要約)

④小金井 喜美子 一八七〇～一九五六(明治三～昭和三一) 86歳 山口県

小説家 翻訳家 歌人 森鷗外の妹 星新一の大叔母

*昭和二十年一月二十日付

昨年主人の不幸に御丁寧な悔状感謝。小冊子、印刷所火災のため遅れ校正不行き届きであるが一部送る(要約)

④相馬 愛蔵 一八七〇～一九五四(明治三～昭和二九) 84歳 長野県

実業家 早稲田卒 相馬黒光の夫 本郷でパン屋中村屋をはじめ 後新宿に移店 インドの革命志士ビバリ・ポースをかくまった

*昭和十八年四月三十日付

文化勲章御受領祝賀いたします。七人中其の四人迄が我辱知なりし事は自分も共に賞されし心地で喜んでいます。ポースも至つて丈夫にて目下昭南島に有り、来る十月は入印の予定の由。(要約)

④鳥居 龍蔵 一八七〇～一九五三(明治三～昭和二八) 83歳 徳島県

考古学者 人類学者 上智大学教授 蒙古・シベリア・西南アジア等を探查 朝鮮平壤に楽浪郡の古墳の存在を發表

*昭和七年三月 返信葉書 蘇峰先生古希祝賀会欠席通知

④鳥居 きみ子

鳥居龍蔵の妻 子供連れで蒙古の地の研究調査を行う 日常の精密な調査が出来た 昭和二年『土俗学上より観たる蒙古』を大鏡閣より出版

*昭和二月五日付

門司香港丸にて主人や娘が出発の折りは御心つくし御国産のお菓を頂

きまして御芳志を一同厚く感謝いたしております。私も家の方も先月末にやうやう研究費のたしにと一年前納で借りて頂きました。十二、三日頃主人が大連に出て参るまでに間に合ふ様出発いたします。おいとまごひも申上げずでかけまして誠に御無礼申上りました。(要約)

④ 浅田 みか 一八七二—一九五五 (明治四〇—昭和三〇) 84歳 静岡県
日本基督教婦人矯風会理事

* 昭和二十九年八月十六日付
本日は久しぶりに久布白氏の御訪問を受け昔話に花が咲き、御なつかしくなりました。先生のご揮毫をお願い申し上げます。(要約)

④ 吉岡 弥生 一八七二—一九六〇 (明治四〇—昭和三五) 89歳 静岡県
女子医学教育者 漢方医の娘 済生学舎卒 明治二十五年 医術開業試験に合格 至誠学院院長と結婚 明治三十三年 東京女医学校を開設 女性の社会的地位の向上に努めた

* 昭和七年三月十日付 返信葉書 蘇峰先生古希祝賀会出席通知

⑤ 国木田 独歩 一八七二—一九〇八 (明治四〇—明治四二) 37歳 千葉県
東京専門学校 (早稲田) 中退 弟収二と共に民友社社員 日清戦争の従軍記者となる 佐々城信子との恋愛・結婚から離婚へと波乱に満ちた時代は 大事な所で蘇峰の世話になった 明治三十年「独歩吟」を発表後次々と自然主義の作品を世に出した

* 明治四十一年五月七日付 南湖院よりの葉書 死の数日前のもの
肅啓 又もや佳葉御恵送下さり、難有存候。昨日は又其
水老先生御見舞い下さり、難有存候。八十七歳の御老体にして実に壮大の態あり。来年米の御祝まで小生も如何しても生き度き者と存候。

(全文・新出資料)

⑤ 山室 軍平 一八七二—一九四〇 (明治五〇—昭和一五) 68歳 岡山県
キリスト教伝道者 同志社卒 日本救世軍の創設・発展に尽力 歳末慈善鍋など社会事業に貢献した

* 明治三十七年六月八日付 紅海よりの絵葉書
頂戴シタ「第四日囉講壇」独ニテ読ミ、又ハ友人ト会読シ、友人ニ貸シテ読マセナドシテ大ナル益ヲ得候 御厚意ヲ奉謝候 (要約)
* 明治四十二年四月二日付 モスクワより クレムリンの巨鐘の絵葉書

⑥ 佐々木 信綱 一八七二—一九六三 91歳 三重県

歌人 国文学者 東大卒 歌人として 明治三十年落合直文、与謝野鉄幹らと新詩会を起し革新をはかった 明治三十一年「心の花」を創刊 蘇峰の歌の師であり 添削原稿が当館に多く保存されている

* 明治三十一年 封筒なし

心の花は一昨年来民友社にて印刷ご厄介になっていたが、この度から竹伯会より発行いたすことと相成りました。国民紙上にてしかるべくご紹介いたします (要約)

⑥ 佐々木 雪子

佐々木信綱の妻 蘇峰の従兄弟藤島正健の娘
昭和の戦後 () 年九月二十一日付

玄関さまに野菜を差し置きましたのに、わざわざ御状戴き、お礼申し上げます。御文の中に心身疲困と御しるしあり、奥様も御いたましく、ことに老先生の御上を思ひあげ候て、涙こぼれました。徒然草の「何事も古き代のみぞしたはしき」の句のように互いに古き時代をしのび、なつかしみました。(要約)

⑥ 与謝野 寛 (鉄幹) 一八七三—一九三五 (明治六〇—昭和一〇) 62歳 東京

歌人 詩人 落合直文に師事 歌集『東西南北』『天地玄黄』を出版 「明星」を創刊 明治三十四年 晶子と結婚 夫婦で森鷗外を尊敬 慶大で国文学、国文学史を講じた

* 大正十二年七月五日付 長文

屢々御高著を頂戴し忝く存じをり候。歴史を文学よりも好み候妻は、少き時間を盗み候ては必ずご高著を通読
先生がいつまでも御若々しさを失いたまはず、小生どもが肩の上のある少

年にて、国民之友を拝見せし頃よりの壮々たる御元気を以て、御天資の多能を豊満に御表現なされること、妻が申上候ごとく、只今の日本にその匹を見ず、真に一人舞台の偉觀を御示し被下候。五十歳となり、やや老の味を知りはじめ候小生の如き者には、殊に先生の御健在と力一杯の御業績とを拝見して、心つよさを感じ申し候と共に、弱小の身相應の勇氣を触発され候ことに御座候。人生は之を他に求め候とき、畢竟寂寞の歎を免れず。要は自ら内に樂地を拓いて、独り酔ひ独り舞ふ外は無之と信じ申し候。この十年來先生が編史のために殆ど御全力をお傾けなされ候も、定めてこの意味ならんと權摩仕候(原文の一部を読みおこし)

⑤⑤羽仁もと子 一八七三～一九五七(明治六～昭和三二) 84歳 青森県

女子教育者 東京府立第一高女卒 報知新聞社に入社 女性記者の先駆となる 同社の羽仁吉一と結婚 夫婦で「婦人之友」を創刊し自由学園を創設 キリスト教的自由教育を實踐

*昭和十七年四月二日付 自由学園卒業式招待状 印刷

⑤⑥ガントレット恒 一八七三～一九五三(明治六～昭和二八) 80歳 愛知県
矯風会会頭

*昭和十五年十一月二十九日付 日本基督教婦人矯風会本部内 林歌子 女史喜寿記念会より ガントレット恒・久布白落実・浅田みか子の連名 さらかて御配慮を仰ぎ居し林女史喜寿記念募金も大方の御同情により 今までに金五万円に相達し申し候。来る十二月十四日の御誕生日までには非共金七万七千円に充たして御本人を無限の感謝と喜びの源になるよう、この上とも御力添へを給はりたく御願ひ申上候(要約)

⑤⑦高浜 虚子 一八七四～一九五九(明治七～昭和三四) 85歳 愛媛県

俳人 小説家 仙台二高中退 中学時代から正岡子規に兄事 定型と季語を伝統として尊重した 明治三十一年から「ホトトギス」を主宰 明治四十一年より二年間「国民新聞」に入社 「国民文学欄」を設け 主幹となる 「朝日新聞」は「国民新聞」に一年遅れて「朝日文学欄」を設けその主幹は夏目漱石であった

*大正八年六月二十八日付
御家族皆様の心からの御紀訪を忝し誠に一日の清遊でした。(要約)

⑤⑧徳富 愛子 一八七四～一九四七(明治七～昭和二二) 73歳 熊本県

徳富蘆花の妻 女子高等師範卒 蘇峰の紹介で二十一歳の時 蘆花と結婚 「家庭雜誌」に隨筆を書き 「富士」は蘆花との共著

*昭和(三)年三月二十三日付 府下千歳村より

相続につきまして八王子区裁判所からご通知申し上げました事と存じます。此方の相続につきましては全権兄上さまにございます事、私と致しましてはおさしずのままになるべき身でございます。一切の物欲など思ふもうるさく思えます身にとりまして、ほんとうに相続など苦痛さへかんじます。さりとて生きてゆくとすれば、村住居の役場や何か公けの交渉に都合も御座いますし、旧婦人に育て上げられた今日、新婦人の人待ちにして容易の事ではなり得られぬを寒々とかんじられます。(要約)

⑤⑨井上 秀(子) 一八七五～一九六三(明治八～昭和三八) 88歳 兵庫県

日本女子大学に学び 母校の学長に就任

*昭和十六年十二月十五日付 卒業証書授与式出席御案内(印刷)

⑤⑩相馬 黒光 一八七六～一九五五(明治九～昭和三〇) 79歳 宮城県

隨筆家 明治女学校卒 相馬愛蔵と結婚して新宿中村屋を創業 萩原守衛(碌山)、中村舞、ビバリ・ポース、エロシエンコらと親交があり 村屋は芸術家のサロンの場でもあった 黒光と国木田独歩の妻信子は従姉妹 回想録『黙移』は当時の文人や独歩の言行を伝えている 娘俊子はポースと結婚

*昭和二十七年十一月二十五日付

先生に最後をお願いをしたい。私ども兩人存命中に、故ビバリ・ポースの日本亡命記をありのままに書き残し度、着々とはじめたが、愛蔵が倒れ、私一人が残された。考慮の末、長男安雄に手伝わすことにした。ポースの想い出の一端なりと先生から承われるを得ば故人は勿論私共一族の最も光榮とするところ。(要約)

⑥1 島木 赤彦 一八七六—一九二六（明治九—大正一五）50歳 長野県
アララギ派の代表的歌人 歌論の研究と普及に努めた

*大正十四年七月十四日付
国民新聞紙上に連載された「太虚集」の評を、アララギ八月号へ転掲仕
度御寛容下されば大幸の至り。（要約）

⑥2 平福 百穂 一八七七—一九三三（明治一〇—昭和八）56歳 秋田県

日本画家 東京美術学校卒 作風は伝統的な画風を越え磨きのかかつたスケッチ風の筆法を骨格として独自の風格を備えている またアララギ派の歌人でもあった

*大正（十五）年三月三十日付

二月より病臥せる友人島木赤彦氏遂に起たず。昨日この村の丘に葬り候。その畢生の事業とせる万葉新解を見るに至らずして逝ける事返す返すも遺憾の極に候。先生より御懇篤なる御弔電をいただき、故人に代り厚く御礼申上げ候。（要約）

⑥3 斉藤 弔花 一八七七—一九五〇（明治一〇—昭和二五）73歳 群馬県

新聞記者 小説家 随筆家 昭和十八年『家庭に活く徳富蘇峰夫人』を出版

*昭和二十二年九月四日付

先日は御温容に接し、いつまでもお側離れ難かつた。東香子宛御書簡は幾度か私の胸に迫るものあり。一代の文宗、蘇峰先生をして如斯親愛を受けた東香子こそ実に羨望の至りにござさうろう。（要約）

⑥4 斉藤 ちか子

斉藤弔花の妻

*昭和二十七年一月四日付

戦災孤児や白痴の子等が弔花の墓を囲みてうたうさまに涙いたしました。子供ずきの弔花、子供の友であった故人が地下にてさぞさぞ満足して微笑しているでしょう。弔花を追憶するたびに先生の御高恩を思い感激しています。（要約）

⑥5 与謝野 晶子 一八七八—一九四二（明治二一—昭和一七）64歳 大阪

歌人 詩人 堺女学校卒 明治三十四年上京し妻と離別したばかりの与謝野鉄幹と結婚 「明星」を代表する歌人として活躍 「乱れ髪」は近代を告げる画期的な歌集といわれた 「君死に給ふことなかれ」は有名文化学院の創設に参加 十一人の子供を育てた 歌集「心の遠景」に「耶穌の妻サンタマリヤの嫁君は無けれど君に似るこちする—徳富蘇峰先生令夫人に—」がある

*大正十年三月二十五日付

ご高著拝受。大きな子供供達とくり返し拝読。「太陽とばら」再版できましたら署名をして差出します。「人間礼拝」も送ります。一端でもお目にふれるとうれしい。（要約）

⑥6 国木田（佐々城）信子 一八七八—一九五一（明治二一—昭和二六）73歳 東京

佐々城本支と豊寿の長女 相馬黒光の従姉妹 国民新聞社の従軍記者であった国木田独歩と十七歳のとき恋愛・結婚・離婚をした 蘇峰はこの件に関わった 信子是有島武郎の『或る女』のモデルといわれる

*明治二十八年十一月六日付 独歩と連名 結婚五日前の手紙

親を泣かせ友を怒らせ前途暗澹たる悲境、生きていく甲斐がない。佐々城氏と相談して宜しいように取り計らってほしい。（要約）

⑥7 長谷川 時雨 一八七九—一九四一（明治一二—昭和一六）62歳 東京

劇作家 佐々木信綱に師事 はじめ小説を書いたが「読売新聞」の懸賞に当選したことを機に劇作家となる 三上於菟吉と結婚 「女人芸術」を創刊 多くの女流作家を育てた

*昭和二年五月四日付

「近代美人伝」につき、ご高評たまはるよし、思いがけぬ幸せ。お疲れのお目を写真がおなくさめいたすかと差出しましたのに 本文までお目通しいただき、御多忙を存じおる身には一層うれしい。（要約）

⑥森田 草平 一八八一—一九四九(明治一四—昭和二四) 68歳 岐阜県

小説家 東京帝国大学卒 夏目漱石の推挽により平塚らいてうとの恋愛事件を書いた『煤煙』を『東京朝日新聞』に連載 注目をあびた 戦後共產党に入党

*昭和十六年八月十一日付

『近世日本国民史』七十巻を通読し、先生から教えを受ける最も深い者の一人です。(要約)

⑨齊藤 茂吉 一八八二—一九五三(明治一五—昭和二八) 71歳 山形県

アララギ派の歌人 青山脳病院院長 伊藤左千夫に師事 左千夫没後は島木赤彦らとアララギ派の中心的歌人として知られる

*大正十五年五月八日付

島木赤彦君については生前は勿論、逝去の際も非常に御同情をたまはり、深く深く感謝奉り候。来る十六日午後一時より増上寺に於いて、赤彦追悼会を営みたく、ついでには先生に三十分間にも御参加たまはりたく、お経の終るのは二時頃と存じ居につき、二時頃より三十分にてよろしくお願ひ。甚だぶしつけにて失礼千万、何卒おゆるしくください。なほ百穂画伯同道ねがいます。(要約)

⑦齊藤 輝子

齊藤茂吉の妻 旅行家

*昭和二十九年六月二日付

過般は多勢にてお邪魔申し上げ、老先生のお元氣なお姿を目のあたりにしてほんとうに嬉しゅうございました。御高著を頂戴いたし誠に誠に有り難く、御礼申し上げます。其の時の写真不出来ですがお送り致します。御笑納ください。いよいよ梅雨の折りから御大切に遊ばしてくださるよう、心より祈りあげます。孝子様ご上京のとき、ご来遊のほどお待ちも申しあげます。塩崎様にも宜しくお伝え下さいませ。(要約)

①久布白 落実 一八八二—一九七二(明治一五—昭和四七) 90歳 熊本県
婦人解放運動家 女子学院卒 父大久保真次郎は新島襄門下の牧師母

音羽子は蘇峰の姉 明治三十六年渡米 移住日本人の売春婦の現状に接し 帰国後大正五年 日本基督教矯風会に入る 昭和十三年 市川房枝らと婦人参政権獲得期成同盟会を結成 昭和三十七年 矯風会会頭

*明治四十三年三月十八日付 シアトルよりの絵葉書

*明治四十四年一月一日付 イギリスよりの絵葉書

*昭和二十七年五月一日付

九十の齢を重ねて故郷に向う猪一郎叔父君へ
いよいよ万事解除誠に誠に喜ばしく、心からお送り申し上げます。湯浅八郎氏も国際キリスト教綜合大学の献堂式挙行、私も京都より帰京早々参列叔母上、母上の喜び、幾つもの心を抱いておめでとをもうしました。京都で新島先生の旧邸を尋ね、七歳の時お目にかかりし当時を思ひ起しました。この度の御旅行は感慨深き情感あふれる旅と存じ上げます。どうか御疲れの出ませぬやうくれぐれもよろしく願上ます。(要約)

②西川 文子 一八八二—一九六〇(明治一五—昭和三五) 78歳 岐阜県

婦人運動家 京都高女専攻科卒 恋愛結婚 夫の死後二十二歳で平民社に入社 婦人の啓蒙・解放・政治運動に活躍 「自動道話社」創設

*昭和七年六月十四日付

私共は日頃先生を此なく御敬慕申し上げながら御多忙なる先生に拝顔願ふは恐縮のいたりと思つてゐる。昨日の「日日だより」にて反省の仕方御紹介いただき、ありがたい。衆目崇拜の先生の御靈筆を以て一流新聞の尊き欄に只ただ身にあまる光栄。(要約)

③鳩山 一郎 一八八三—一九五九(明治一六—昭和三四) 76歳 東京

政治家 東大卒 鳩山和夫と春子の長男 大正四年 衆院に当選 政友会に属し 書記官長 文相などに就任 敗戦後自由党結成に参加し初代総裁となる 妻薫は共立女子学園長

*昭和十三年七月十日付

父の如き御親切誠にありがたく厚くお礼申上候。忍耐は勿論、修養に力め御高志に報ゆる覚悟に御座候。(要約)

⑭小寺 菊子 一八八三—一九五六（明治一六—昭和三一）73歳 富山県
小説家 小学教師 タイピスト 婦人記者 徳田秋声に師事し苦学を続
ける 明治四十四年「大阪朝日新聞」の懸賞に当選した「父の罪」で脚
光を浴びる 同年九月創刊された「青鞥」に加わる 不幸な生い立ちと
係累を負う苦勞を描き続けた

*昭和十一年九月九日付

八日付「日日新聞」夕刊紙上にて拙著『深夜の歌』につき沢山のお言葉
を頂戴し光榮至極。先生が故梅井藤吉氏を御存じでられる由、非常に
うれしい。有難くお礼もうしあげる。（要約）

・梅井藤吉 政治家・社会運動家（一八五〇—一九二二）

⑮岡田 信一郎 一八八三—一九三二（明治一六—昭和七年）49歳 東京
建築家 大正一年 大阪市中中之島公会堂の指名競技設計に一等当選しこ
れが出世作となった 東京の旧歌舞伎座・鎌倉国宝館・東京府美術館・
明治生命ビル・関東大震災で焼け落ちたニコライ会堂のドーム再建設計
にあたるなど 様式建築の鬼才といわれた 名妓万龍と結婚

*昭和三年十一月一日付

「山陽先生朱批細香女史詩稿」御恵送有り難く拝受。猫の小生に小判の
如きものであるが、三読して自ら啓発致したく存じ候。（要約）

⑯岡田 静子（万龍）

岡田 信一郎の妻 東京赤坂の春本から芸者万龍として宴席にでた

明治三十三年 許可になった私製葉書の「美人絵葉書」にモデルとなり
明治一の美人と評判になった 最初の結婚では夫は一年で急死 その後
建築家岡田信一郎と結ばれた

*昭和（ ）年十一月十三日付

御令嬢様の縁談整い、お祝を贈る。（要約）

⑰守屋 東一八八四—不明 東京

基督教婦人矯風会理事 晩年の矢島楯子の代筆・外遊の同行者

*大正十年十月十二日付 ビクトリアより

昨夕シアトルから無線電信で、リセプションをするから主席してほしい
とのこと、喜んで出席の返電しました。口火は切れました。順々に仕事
は定まってまいります。先生のお供は私にはよほど性にあって居る
やに存せられます。無事着お知らせまで。（要約）

*大正十年十月二十八日付 シカゴより 絵葉書

シカゴ、エバンストンでもこのうえない同情を受けました。先生の行は
初めて純米国人に理解され、驚かれました。尊敬して其の使命を全うせ
んことを述べられる次第に只感激。（要約）

⑱平塚 らいてう 一八八六—一九七一（明治一九—昭和四六）85歳 東京

社会運動家 日本女子大家政学科卒 卒業後禪を修行 明治四十一年
森田草平と塩原事件を起こした 明治四十四年 婦人の文芸誌「青鞥」
の創刊号に「元始、女性は太陽であった」を執筆 これは婦人解放運動
のスローガンとなった 新しい男女の共同生活をうたい 婦人問題評論
家として活躍 大正七年 与謝野晶子と母性保護論争を行う 大正九年
市川房枝らと新婦人協会を結成し 婦人参政運動を展開 昭和五年 高群
逸枝らの無産婦人芸術連名に参加 戦後は平和憲法擁護を唱えた

*大正十五年十月六日付

近著『女性の言葉』御贈りした。お納め頂きたい。御多忙の中あまりに
かつて過ぎた申し分では御座いますが、御覧頂ければ、更にそれ以上の
ご批評をいただければこの上ない幸。（要約）

⑲岡本 一平 一八八六—一九四八（明治一九—昭和二三）62歳 北海道

漫画家 東京美術学校卒 夏目漱石に認められ「朝日新聞」に入社 同
紙を中心に大正期の漫画界をリードした 岡本かの子の夫 画家岡本太
郎は息子

*昭和九年十一月二十一日付

未だお会いしてませんが尊敬申し上げます。甚だ唐突のやうです
が愚妻かの子が永年仏教を信奉研究いたし参り、この度大東出版社の需
により仏教読本一卷脱稿出版いたしました。出版書肆は是非先生の御推
薦の御一筆を頂戴願はれまじくやと申します。かの子儀も一度はその光

栄に預かり度き願ひを小生まで申出でました。小生に於いても元より願望同意に堪へざるところ、よつて御願ひ申上げます。御繁多の中を誠に恐入りますが御一文を御下附下さらば有難き仕合せに存じます。(要約)

⑩九条 武子 一八八七―一九二八(明治二〇―昭和三) 41歳 京都

歌人 西本願寺法主大谷光瑞の妹 男爵九条良致と結婚 共に渡欧したが单身帰国 十年余の夫への思慕と孤閨をうたつた「金鈴」は世の同情を集めた 仏教婦人会長 社会慈善事業に尽力

*大正()年四月二十一日付 深紅の巻紙使用
友達と先生の処に遊びに行く(要約)

⑪賀川 豊彦 一八八八―一九六〇(明治二一―昭和三五) 72歳 兵庫県

キリスト教社会運動家 プリンストン大卒 神戸神学校に進み 大正三年アメリカに留学 帰国後神戸の貧民窟にもどり 無料巡回診療をはじめた 大正九年 自伝的小説『死線を越えて』は当時の大ベストセラーとなる

*大正十年八月十六日付

御手紙をうれしく拝見して喜んでいきます。何か知らないが、それは主義とか理屈とか、面倒なものからでなくて、私は先生の「にんげんらしさ」に云ひ知れぬなつかしさを見つけて居ります。それであなたが帝国主義者であらうが、皇室中心主義者であらうが、或はその正反対の性格と思想の持主であつても私には少しもかまいません。南国の若々しい血と詩人的肌合いと先生が私のようなものに面白い話を沢山して下さるその美しい教師として私は日本でタッタ一人の先生を見付けたような気がするのである。私はミリタリズムにも不賛成です。私としては日本の光輝と血と光譽を誇ります。私が日本人である以上その誇りがどうして他人に蹂躪されて喜ぶものですか。私はそれに就いて主義としたくないのです。私は日本の誇を以つて世界を愛して行きたいのです。帝国主義なら私は私一人の帝国主義です。私の帝国主義は人に強いられ無いものです。私は白人にも威張らせ、黒人にも威張らせ、凡ての人が威張るのが善いのです。自ら威張ることを知るものは他人を尊敬することをも知つて居

ります。(要約)

⑫賀川 はる 一八八八―不明(明治二一―不明)

賀川豊彦の妻 豊彦と共に貧民窟で働いた

*大正十年八月七日付

収監中の主人の健康について御尋ねの御書面をたまはり御礼申上ます。極めて元氣にて却て読書と瞑想に時間を与へられたるを喜び居る程でございますから何卒御安心下さいませう御願ひいたします。(要約)

⑬大石 順教 一八八八―一九六八(明治二一―昭和四三) 80歳

十七歳の時に両手を失い 四十五歳で出家 障害者の為に尽くす 口を筆をくわえて美しい字・絵を描き 日展に入選 京都の仏光院を建立

*昭和二十九年八月二十日付 草色のキリギリスの絵が描かれている残暑お見舞い(要約)

⑭深尾 須磨子 一八八八―一九七四(明治二一―昭和四九) 86歳 兵庫県

詩人 京都菊花高女卒 与謝野晶子に師事 大正十四年 詩集『斑猫』を上梓し渡仏 コレットと知り合う 平塚らいてふらと『新日本婦人の会』結成に力を入れ 戦後は平和運動に活躍した

*大正十一年十一月八日付

温情あふれるお手紙ありがたい。先生の御心を仰いでひざまつき、赤子の心からお父様とお呼びしたい。晶子夫人と一緒におもじしたい。(要約)

⑮岡本 かの子 一八八九―一九三九(明治二二―昭和一四) 50歳 東京

小説家 歌人 跡見女学校卒 明治四十四年『青鞥』に参加 仏教研究家としても著作活動を行う 芥川龍之介をモデルにした『鶴は病みき』を発表

*昭和十二年七月十三日付

「日日新聞」にて拙著『女性之書』を讚美していただき、ありがたい。お札をなにとぞお納めください。伏してお願ひ申し上げます。(要約)
・『女性之書』は昭和十一年十一月発行 第二随筆集

⑥東条 勝子 一八九〇～一九八二（明治二三～昭和五七）92歳

東条英機の妻 日本女子大卒 蘇峰は東条の死後 勝子夫人にお小遣をわたしていた

*昭和（二十三年十一月七日以前）七月二十日付

先生よりのお言葉に接し、申しわけなく、勿体ない。私事一度是非参上して久々に親しく御機嫌うかがいたい。家族一同とにかく身体は丈夫。四月閉廷以来面会は叶わないが、臯鴨にてもいと元気に過ごしているよ、その日まで大切からだ、ありがたき事と存じおります。東条内

（要約）

⑦杉田 久女 一八九〇～一九四六（明治二三～昭和二二）56歳 鹿児島県

俳人 お茶の水高女卒 高浜虚子に師事 昭和十一年ホトトギス同人を突然除名された「こだまして、山ほととぎす、ほしひまま」などスケールの大きな俳句と雄大な筆跡から 近代俳句における女流の先駆者といわれる

*昭和九年十一月二十七日付 小倉市富野菊丘より

九州御来遊の節、講演を拝聴、先生の頬に流れていた尊い汗とお帽子とを忘れかねている。（要約）

⑧今井 邦子 一八九〇～一九四八（明治二三～昭和二三）58歳 徳島県

歌人 諏訪高女卒 島木赤彦に師事 「アララギ」に入会 昭和十一年雑誌「明日香」を創刊

*昭和十八年十二月六日付 蘇峰の五女名和盛子の逝去を悼み

名和様御発行の歌集『富士薊』に集められた御歌思ひ出されて心ふかくもくりかへしくりかへし千千なる思ひにかきみだされ（要約）

⑨三宅 やすこ 一八九〇～一九三二（明治二三～昭和七）42歳 京都

小説家 評論家 お茶の水女子大卒 夏目漱石・小宮豊隆に師事し小説を学んだ 大正十年 夫を失い 女手で子供を育てた 主婦の立場から女性問題を平易かつ自由率直に論じ 講演にも活躍

*大正十五年二月二十一日付 蘇峰の返事済みの印「ス」あり

この度私の短編集「或る夫人の手紙」と申しますものをアルスより出版致しました。それにつき今まで感想集のみでございましたので、今度出版記念会を開くと申す事に友人はかってくれまして、準備中で御座います。右発起人には少数の主なお方に願ひました、誠に申兼ねます次第でございますが、御知遇を頂きました光栄に 先生の御名をお連ね頂く事が相叶ひましたらなら、これに過ぎることはございません。（要約）

⑩三上 於菟吉 一八九一～一九四四（明治二四～昭和一九）53歳 埼玉県

小説家 早大卒 代表作「雪之丞変化」で文壇の地位を確立 十二歳年上の長谷川時雨と結婚

*昭和十二年六月十八日付

私の持病について御丁寧な御見舞い状をたまはり有難う存じます。発病当時、先生の御著書を読みふけておりましたのは、あのまま死んでしまったならば、猶更幸福なやうな気がいたします。しかし生きてしまつた以上はこれからも一層勉強してゆくつもりで御座います。なにせ困憊いたしておりますからにはるかに一書を裁して御礼を申し上げます。猶長谷川もこの文章を書いてをりまして、先生の御厚志を非常に悦びをります。（要約）

⑪高群 逸枝 一八九四～一九六四（明治二七～昭和三九）70歳 熊本県

女性史研究家 昭和二年 下中弥三郎らの農民自治会に加わり活動 女性史研究を志し 一日十時間余の勉強を欠かさなかつたという

*昭和十一年十月十八日付

拙著『大日本女性人名辞書』をお届けする。今後の修正に依つて必ずりつばなものにしてご高庇に酬いる。この後四、五巻出す。辞書は生きている間は絶えず増補する。（要約）

⑫森田 たま 一八九四～一九七〇（明治二七～昭和四五）76歳 北海道

随筆家 森田章平に師事 漱石門下生などと交わる 昭和三十七年参議院に自民党から立候補 四十三年まで議員を務める

*昭和二十五年四月十七日付 鎌倉山より

お尋ねし先生のご機嫌よろしい御様子にうれしくなりました。その後吉屋さまと湯河原に行き、ひさしぶりに女流作家のかたがたと一夜を過ごし、翌日東京へ出てベルトラメリ能子さんの独唱会を聞き、鎌倉山へ帰りました。昨夜私宅に虚子先生、三笠宮さま、立子さまお集まりになりまして句会を催し頂戴の硯を三笠宮様に使ひぞめて頂きました。光子さんはいまは山室軍平さんの御子息にかたずいてをられます。また吉屋さんがおたずになります時は健康がゆるせば私も又おともさせていただきます。(要約)

④三吉屋 信子 一八九六～一九七三(明治二九～昭和四八) 77歳 新潟県

小説家 栃木高女卒 在学中から少女雑誌に投稿し『花物語』など少女小説家として世に出る 大正八年「大阪朝日新聞」の懸賞に『地の果てまで』が当選 戦後は『安宅家の人々』『徳川の夫人たち』などの歴史小説を書いた 『鬼火』で女流文学賞を得る 蘆花を弟に持った兄蘇峰の苦勞をよく理解した一人

*大正十四年四月十五日付 長文

御揮毫を乞ふの記 信子は女学校時代、徳富といふお爺さんが「文章報國」を唱えるをまことに、頭の古いことであると思っていた。それが二、三年前から「文章報國」の心持ちがようやく合点がいった。是非御揮毫をいただきたい(要約)

④中河与一 一八九七～一九九四(明治三〇～平成六) 97歳 香川県

小説家 早大中退 昭和十三年の『天の夕顔』は代表作 戦争中は超国家主義者になった

*昭和十九年七月二十一日付 速達 蘇峰の返事済みの印「ス」あり

サイパン島の悲痛をきき胸ふさがり、みずから肖み居り候。昨夜はラジオを通し先生の御高遠かつ最も適切のご指示拝聴致し、先生の御存在の偉大さ難局に処するまでの日本にとっての御教へ、この上なく感動いたし候。(要約)

④中河 幹子

中河与一の妻

*昭和(二十二)年八月二十七日付

やうやう秋らしく相成りほつといたしてをります。先生には例の御病氣の方は如何でいらつしやいますか。いつもいつもおしのびいたし、いつまでもいつまでも御長命おつづけいたただきたく、お祈りいたしてをります。先日は御染筆かたじけなく与一とともに喜びいただきました。一度二人にて熱海へまいり、先生におめにかかれましようか。最近詠破れに自去年とて秋はありけむを月見る椅子も出すとせざりし ひそやかに夜半に時雨のふるに似てまなうらあつし国の行末(要約)

④中村 汀女 一九〇〇～一九八八(明治三三～昭和六三) 88歳 熊本県

俳人 高浜虚子に師事 昭和九年「ホトトギス」同人となる 家庭の日常を情感豊かに詠む女流俳人として知られた 杉田久女とも交流があった 晩年の蘇峰に俳句の添削を依頼された

*昭和三十一年六月十一日付 俳句の添削八句

「堂々と朴木榮え我は老ゆ」これは「朴若葉して」にすると「我は老ゆ」が活きてくる。このお句は先生を感じさせる大ぶりのお句で好き。「風花」お送りする。(要約)

④山室 民子 一九〇〇～一九八一(明治三三～昭和五六) 81歳 東京

社会事業家 東京女子大 救世軍万国士官大(イギリス)卒 山室軍平の娘 父の影響でキリスト教の立場から社会教育に従事 戦後日本救世軍本営総務部長となり 社会教育につとめた

*昭和十六年三月七日付

昨年(三月七日)早朝、父重態のことをご通知したところ、先生には雨の中わざわざ熱海よりお見舞にお越し下さいまして父を慰め、私どもを励まして下さいました。父の葬儀或は記念会の際にはそれぞれ丁重且つ周到適切なるご弔辞を賜はり、真に忝く存じました。私共の家庭にも、救世軍の内外にも様々の変遷が有りました。父の生前、逝去前後より今日に至る常に変わらぬご厚意に謹みてお礼申し上げます。(要約)

⑧名和盛子 一九〇三—一九四三(明治三六—昭和一八) 40歳 熊本県

蘇峰の五女 名和長光氏と結婚 身体が弱く 度々山中湖の双苴荘で過ごした

*昭和十五年七月三日付

国民史の一万回に達したるをことほぎて五首 ただただ御勉強、御運動をすこせくれぬやう、くれぐれも御願ひ申上げ候(要約)

⑨星野 立子 一九〇三—一九八四(明治三六—昭和五九) 81歳 東京

俳人高浜虚子の二女 若いころから虚子に師事し「ホトトギス」の代表女流俳人として活躍 昭和五年 女性を対象にした俳誌「玉藻」を創刊主宰した

*昭和()年九月十七日 虚子と連名 立子筆

今日ご都合も伺はずに参りましたが、御目にかかれなくても、御訪問申し上げたといふ事で満足して帰りますから 決して御無理をなさらぬように願ひます。(要約)

⑩中本 たか子 一九〇三—不明(明治三六—不明) 山口県

「女人芸術」に参加 女工オルグで活躍 釈放・入獄の悲惨な経験を重ね「南部鉄瓶工」を著す 文芸評論家蔵原惟人と結婚

*昭和十三年四月四日付 蘇峰が返事を出した印「ス」あり

拙作『南部鉄瓶工』をお手許に送った。ご覧下さるよう、伏して御願ひ。私は未だ名もない若輩です。日本女性のために出版に御努力下さいます先生に是非御引立を頂きたい。先日、東日紙上で先生がパールバック夫人の『大地』の御高評を拝見し 触発されるところが多。識見高き先生のご叱正を頂きたい。穩健妥当な御批判を遊ばす先生の御高評を頂きたい。失礼をもちへりみず、申し出ました。(要約)

⑪八重樫 折美子 一九〇四—一九四三(明治三七—昭和一八) 39歳 岩手県

青山学院英文科卒 大正十五年「主婦の友」の社員として蘇峰の口述筆記に行き 能力を認められる 国民新聞社に移り蘇峰の秘書となる 講演や座談会の速記を受持ち 昭和四年 蘇峰が「国民新聞」を退社したと

き一緒にやめ 民友社で蘇峰係として働き信頼を得る 昭和十年 中央公論から出版された『蘇峰自伝』の口述筆記をし 編輯も行った 昭和十八年 癌になり 七月に入院 十一月末に亡くなる その間 蘇峰は山中湖から毎日のように速達で見舞状を出した 山中湖の花や葉の押し花が同封されていたこともあった 百三十通になった蘇峰の手紙は 昭和二十四年 野ばら社から『徳富蘇峰翁と病床の婦人秘書』と題して出版された

*昭和十八年五月十七日付 楽閑荘御内 徳富先生宛 「絶筆？」と封筒に蘇峰の赤エンピツの書き込みあり

錦簡恭受、感涙と共に拝読仕りました。賤恙尊慮を煩はし恐縮に存じます。且つ又た過分の御見舞いを御恵投に與りいつもいつも御温情、拝謝の言葉もありません。病状も一進一退の有様にて困却致してをります。何も出来ず容膝の小室に焦燥の身を横ふるのみで御座います。紫山先生の帰幽には全く驚入りました。せめて生前に例の企てが完成して幾分にも晩年の寂寞をお慰め出来ましたらどんなによかつたかと聊か残念にも存じます。二十四、五日には必ず御無理遊さぬ様そののみ今から御案じ致してをります。御講演なども是非短く遊さる様切に御願申し上げます。御眼疾呉々も御大事に遊さる様願ひ上げます。待望の逗子御伴も叶はず人事不如意を長嘆致さずにはをられなくなる濡沢二十年前、老龍庵の階上 冷きお茶を頂て御話を伺ひましたことをなつかしく思出します。仰臥の執筆御判読願いたく、とりあへず御礼まで 御自愛を願ひ上げつつ 又拝(全文)

⑫兵藤 秀子(前畑) 一九一四—一九九四(大正三—平成六) 80歳 和歌山県

第十一回オリオンピック ベルリン二百メートル平泳で優勝 実況放送で河西アナウンサーの「前畑ガンバレ」は有名

*昭和十四年三月五日付

先生には益々御壮健にて昭和国民読本を御書き遊ばされ 私もうれしく拝見させて頂いております。有難う御座います。戦場の主人も皆様方のお陰で無事任務遂行につとめております。(要約)

⑩湯浅 新

京都同志社女学校

*明治二十七年十月二十三日付 広島蘇峰宛

大本營にての御通信 日日新聞上にて拝読しています。御陰様で御地の有様が良くわかります。同志社女生徒のため 一場のお話を願ひ上げます。(要約)

⑪遠山 稲子

歌人で明治天皇の寵愛を受け お歌所所長となつた高崎正風(一八三六一九二二)の秘書 正風の語る所を遠山稲子が筆記した『歌物語』『古今集』序についての『進講筆記』がある

*明治四十五年一月二日付 年賀 達筆

⑫持地 えい子

*昭和八年五月六日付 中野区より

今回は私一人としての覚え書きにしか過ぎない此小冊をご紹介をはり、大なる感謝。未一個の女性として、此のさわやかなる見聞が少しにても何等かの御役にたてばと願ひおり候。(要約)

⑬田中 好子

主婦の友社社員

*昭和十二年八月二十七日付

石川社長とのお話身に沁みて何はせて頂きました。尚ほ私まで御丁寧に御馳走に相成りまして誠に恐縮いたしております。(要約)

⑭生田 花世

故生田春月の妻

*昭和十五年十月二十五日付 速達 牛込区より

故生田春月の妻です。主人は著書『山家文学論』に、先生の書評をうけました。夫死去後私は文筆にて生活し、十年勉強いたしました。支那事変起こりましてからのものをまとめ、『銃後純情』として世に出しました。

女の文章報国として一片の丹心でございます。本日お送りしましたので、何卒御厚配ください。(要約)

⑮土井 益子

主婦の友社

*昭和十六年十二月十一日付

この度は突然の御願ひを特に御承引くださりまして誠に有り難う存じました。決戦下における国民生活の力つけと致しまして、御言葉のほど貴く頂戴いたしました。(要約)

⑯古宇田 ふみ

茨城県の一農婦人

*昭和十六年八月十一日付 茨城県より 便箋十四枚 ペン字 蘇峰の返

事済みの印「ス」あり

徳富老先生 数しれぬ老先生敬仰の士のはしくれに、私如き者のございますことをお許しください。何故政府はもつと素裸体になつて農民に日本の真の姿を知らしめて、切破詰まつた覚悟をうながして下さらないのでしょうか。国民学校、青年学校にどうして気骨のある人が出てこないのでしょうか。私は子供二人を教員にして何かしら約束といふようなものがあつて、気魂が律しられ、削られて思ひ萎んでゆくやうです。東日紙上の老先生の御言葉、百姓の私たちは自己の血になれ肉になれとつしんで拝読致しております。北の窓を閉ざして南の窓を払への御説に對しております。玉碎の後に来る光の世を待ち望んでをります。上層が雪霧重畳、混沌として仰ぎ得ぬ——を、もどかしくさへ思つて居りました。

先生、百姓のある分野には以上のやうな人間がたくさんたくさん生きてうごめいています。百姓は既に一つの諦念を胸にして明日の御指示を待機しているものです。つまらぬ繰り言ではございますが、私は純然たる土の生活者でございます。つくりものの上奏文などとは違います。百姓といふものは、こんな觀念に生きていたのだと云ふことを、私は私の敬仰申し上げる老先生にだけお慰へ申し上げたかったです。夜分 蚕の

終桑后 禿筆をとりましたため不遜な字句もございませうが何卒ご寛容下さいませ。(要約)

⑩ 大山 セイ

故海軍大尉大山勇夫の母 福岡県

*昭和十七年二月二十五日付

私は上海で戦死致しました故海軍大尉大山勇夫の遺族で御座います。尋常五年から死の前日まで書いていた勇夫の日記を見ますと、先生の事が何回か書いてあります。先生は日本文化の恩人とも書いてありますので、先生に御挨拶状を差上げ度いとも何回か思ひましたが思ひ止りました。東京市も菓子が少ないと聞きましたので、どうにか手に入りましたので別送申し上げました。味しくはありませんが名物で御座居ます。勇夫も大そう好きで御座いました。缶から出して直ぐお召し下さいませ。柔なりますから。すいません

徳富猪一郎大先生 昭和十七年二月二十五日

故海軍大尉母大山セイ 福岡県朝倉郡安川村下湖

(全文)

⑪ 井上 寿子

東京日日新聞社文化部

*昭和十七年二月二十五日付 書留 第二回蘇峰賞についての報告 当選者福圓亮氏は岡山出身の教諭。調査資料は全部満鉄の図書館の厄介になった。満州を中心として日本を眺め、更に地理的關係に重点をおいて書いた由です。選評は石田幹三郎先生が書いてくださる。

⑫ 大場 鈴子

八重樫折美子の親友 同居し 八重樫の看病をした人

*昭和十八年八月十三日付

私半月程前から急に病院に泊る様になりました、何の用意もないため、こんな紙に御返事をしたためます失礼をお許し下さいませ。先生の御書面の御趣 私事 よくよく承知いたしてをりますればその点御安心いただき度うございます。先生に対しても、八重樫にたいしても、私として

は出来るだけの誠実をつくし度ひと思つてをります。御蔭様にて八重樫もだんだん快くこの頃では入院当時よりずっと元気になつてをります。毎日先生よりいただきますお手紙を大変喜びまして、色々ご心配をおかけ致してすまないくと申し、山中の花をみては早くく山中湖にまいりたいくと申してをります。先生の御目がつかれない様にと八重樫がそればかり気にかけてをります様でございます。(要約)

⑬ 川上 ときは

*昭和二十四年二月十七日付 書留 大田区田園調布 松本方

半世紀以上も昔のこと、先生米国から御同船のバック公使夫人に私をご紹介下されたおかげで、後日私が外交官の妻としての生活にいかほど有益であつたかいまさらお礼、筆に尽くしがたいほど。またご発行の英文雑誌に坪内逍遙氏の劇を私に英訳させて頂いた事なども誠に思い出深く、有り難いこと。あの頃から勉強を続けて居たら今頃は一かどの英文学者にもなり得しかと自分の怠慢をくやんでいる。(要約)

*昭和二十七年二月八日 蘇峰の返事済みの印「ス」あり

矢島先生の御紹介にて御許様にはお目にかかり、「Far East」や婦人雑誌などに時折り書かせて頂きし半世紀あまりも前の事ども、思い出し御厚情の数々、うれしくもありがたくも亦御懐かしうも存じもうしあげます。あの頃は夢多き娘時代でしたがいつしか七十八の老嫗とはなりまして、しかししたのしかりし事は幾とせ経ちても消え申さず。感謝の思出のしるしとして、何か御菓子なりと御送り申し上たく。(要約)

⑭ 大橋 万亀

救世軍熊本熊本支部

*昭和二十六年十月二十三日付 熊本より 後援者代表徳富猪一郎の趣

意書同封

この度は救世軍の再建のため、ご揮毫を頂きまして誠に有り難く拝受。先生の御染筆力は二十二年前と少しも変らない勢いです。先生の御寄付ゆえ、高価に買い上げて頂く。(要約)

⑩大江女子学園高等学校

*昭和二十七年十一月三日付

本校にては文化の日を期し先生に文化功労者として表彰せられました事は勿論当然の当然の事でございます

日本史の史学者として白石先生、山陽先生に勝るとも劣らぬ御先生、否世界的存在であられます事は世間の通評で御座います。殊に当校の特別関係者、特別の後援者で御座いまして、本校としても大いなる名譽とし誇りとする処で御座います。特に今回は揃いも揃って小楠先生を中心とする蘇峰先生、長野先生、矢島先生の三氏であつたことは、重ね重ねの光榮の一つで御座います。(要約)

⑪市原きよ

水俣市婦人会長

*昭和二十九年八月二日付 水俣より

私共のまち水俣のために名譽市民にお成り頂きました御礼や、淇水文庫二十五周年記念式典にはわざわざ塩崎先生をおつかわし下され、多額なる御寄贈を頂戴致しまして、誠に有難く厚く御礼もうしあげます。式典の時も一同感謝感激の涙にむせびました。(要約)

⑫日本基督教婦人矯風会横浜支部

*昭和三十一年十二月六日付 基督教婦人矯風会創立七十年記念募金に

際し、水崎どのを通して多額の御寄付を戴き有難く、厚くお礼申し上げます(要約)

⑬持丸 智恵子

*昭和三十三年八月九日付 救世軍本営

熱海の先生のお宅に於て、私の休養をとらせて戴きました事は光榮であり、又私の一生の思い出となることとさせていただきます。毎朝散歩のお供をさせて戴け、三度三度御食事の御用意をしていただけ、まったく心身に休めて戴けました。孝子おばさまは本当に良い方ですね。私は自分の母のようにわがままをとおして約一週間おばさまとすごさせて戴けました。(要約)



蘇峰堂だより

展示換え裏ばなし

当記念館発行の『徳富蘇峰宛書簡目録』の発行人、1万2千人の中のひとりに、私はずっと心惹かれていた。「小西 和」——郷里(香川県)の偉人である。「海南」と号し、詩をよくし、松亭という号で絵も描く。『瀬戸内海論』の名著がある。明治6年生まれ。少年時代は、夏目漱石赴任7年前の松山中学に学び、明治23年、クラーク博士で知られる札幌農学校へ進む。農園を経営して北海道開拓に努めた。(北海道は日本の富源なり)と、

明治26年、石狩国清真布に小西農場をスタートさせた。その後上京、「東京朝日新聞」入社。編集局文芸部付として、村山龍平社長直々に、月給百十円の高給で遇される。(この頃の「朝日」には下村海南がおり、4年後には漱石も入社する)日露戦争に従軍、挿絵入り記事は好評を博した。晩年、政界入りするが、太平洋戦争突入の軍国主義で、自由民権の政治は滅亡してしまい、郷里に帰り、一農民として生涯の幕を閉じる。昭和22年、享年74歳であった。没年の海南翁の詩、

浮世真に夢の如し 山雲我と俱にあり

斗米を求むるを希はず 唯一農夫

なにか、古来中国の隠士のようにである。

昨夏、私は郷里の長尾町に、海南翁の息子小西欣弥氏を訪ねた。88歳の欣弥氏は素敵な紳士で、ご尊父の「海南文庫」を守り、史料整理、講演とお忙しい毎日である。お話を伺い貴重な史料を拝見し、楽しいひとときであった。「海南文庫」の玄関に、桜の厚板の立派な衝立があり、その板面には李白の詩「山中問答」が刻まれている。齢古希の海南翁が「笑って答えず、心自ら閑かなり」と自刻した心境を思った。

近代日本の夜明けに生を享け、志を立て、信ずる処を堂々と歩み続けた翁の姿に——個々の営みの違いこそあれ——蘇峰の歩んだ人生が重なった。

「小西 和」が蘇峰に宛てた書簡は、当記念館に4通保存されている。

(和田 千枝)

昨年の表情豊かな達磨達の顔に取って代わり、今年は、さまざまな分野で活躍した女性達の書簡がケースに並び、華やかな展示になった。一通一通封筒から出し、展示のために広げる作業をしていると、筆を持ち、居住まいを正して机に向かう、凜とした女性達の姿が自然と目に浮かび、眺めているだけで、こちらまで背筋が伸びる心持ちだった。そこには、蘇峰に宛てて手紙を書いた女性達の、ひたむきで精一杯の姿があった。

それにしても、それぞれの女性の記した字の美しいこと、ため息が出てしまう。かく言う私は、筆無精のうえに筆恐怖症まで患い、それが結構重傷である。毎年、特に年賀状のシーズンには必ず新聞の折り込みに入ってくる「毛筆通信講座」今なら2大特典付き・これであなたも筆美人」の広告に、今年は何年より一層心がぐらっとしながらも、他方ではインターネットに凝って、用もないのにやたらと知人に電子メールを送り付けている。とても矛盾しているようで、実は一番標準的な女性なのではないかと、無理やり思うようにしているこの頃である。

さて、蘇峰先生の目には、こんな私はどのように映るであろうか？

(宮崎 松代)

○展示書簡を選び出すのに苦心した。選ぶ対象としたのは、女性の手紙で内容のあるもの。『蘇峰宛書簡目録』を駆使し、面白そうなものを選び、候補が二百人以上になり、頭の中が書簡でぎしぎし音がするようであった。従来はテーマにあわせて人物をピックアップしてきたが、今回は埋もれている書簡を探そうとしたことで時間がかかった。和田・宮崎両職員が軽快な足どりでステップを登り降りして希望する書簡を出してくれなかったら、この展示はとても出来ないことであった。

○女性の手紙を読みながら感じたことは、なかなか本心を書かないことである。そこで改めて、明治十九年から三十四年までに差出された佐々城豊寿の四十八通の書簡の、内容の重さを感じた。○百十八人の手紙を生年順に並べた目録であるが、並べる事により、見えてくるものが多くあるような気がする。

○明治二十七年、熊本にハンセン病患者のための「回春病院」がイギリス人宣教師リデルによって開設された。リデルは手紙の中で「貴方の影響により、私たちの病院が授かることのできたすばらしい援助」と蘇峰に感謝している。蘇峰の影響力とすばらしい援助は的確な表現である。

○女性からの手紙の半分には目を通した。あとも続けて読むつもりである。展示書簡百十八通の内、七十五通が初展示である。

○リデル研究者熊本大学の猪飼隆明先生、女性の生没年の調べに憲政記念館の入子栄一氏、燐風会の崎浜氏、二宮図書館の方々のご協力に感謝します。

(高野 静子)

平成十年二月十日発行

編集 高野 静子

発行者 竹越 起一

発行所 (財)徳富蘇峰記念塩崎財団

〒597-0333 神奈川県中郡二宮町二宮555
TEL 0463-37110 266

平成十年度 展示書簡一覧表

()は掲載ページ数です
●印は今回初めての展示書簡です

あ	●岡田 静子 (14)	●島木 赤彦 (12)	●中河 与一 (17)	ま
●浅田 みか (10)	●岡田 信一郎 (14)	●嶋田 三郎 (4)	中村 汀女 (17)	●松本 萩江 (4)
●跡見 花咲 (2)	●岡本 一平 (14)	●下田 歌子 (4)	●中本 たか子 (18)	●三上 於兎吉 (16)
●生田 花世 (19)	●岡本 かの子 (15)	●杉田 久女 (16)	●成瀬 仁蔵 (6)	●三宅 花圃 (9)
●石井 十次 (8)	か	●相馬 愛蔵 (9)	●名和 盛子 (18)	●三宅 やす子 (16)
●石井 たつ (8)	●嘉悦 孝 (8)	●相馬 黒光 (11)	●新島 襄 (3)	●持地 えい子 (19)
●市原 きよ (21)	●賀川 豊彦 (15)	た	●新島 八重 (3)	●持丸 智恵子 (21)
●井上 秀子 (11)	●賀川 はる (15)	●高浜 虚子 (11)	●西川 文子 (13)	●森田 草平 (13)
●井上 寿子 (20)	●川上 ときは (20)	●高群 逸枝 (16)	●日本基督教婦人矯風会 横浜支部(21)	●森田 たま (16)
●今井 邦子 (16)	●ガントレット・恒 (11)	●竹崎 順子 (2)	●野口 そ恵 (8)	●守屋 東 (14)
●入沢 達吉 (8)	●九条 武子 (15)	●田中 正造 (2)	●野口 寧斉 (8)	や
●入沢 常子 (8)	●国木田 独歩 (10)	●田中 好子 (19)	は	●八重樫 折美子 (18)
●巖谷 小波 (9)	●国木田(佐々城)信子(12)	●東 条 勝子 (16)	●長谷川 時雨 (12)	●矢鳥 楳子 (2)
●植木 枝盛 (6)	●久布白 落実 (13)	●土井 益子 (19)	●鳩山 一郎 (13)	●山室 軍平 (10)
●潮田 千勢子 (3)	●古字多 ふみ (19)	●遠山 稻子 (19)	●鳩山 春子 (7)	●山室 民子 (17)
●内村 鑑三 (7)	●小金井 喜美子 (9)	●徳富 愛子 (11)	●羽仁 もと子 (11)	●湯浅 治郎 (4)
●海老名 弾正 (5)	●小崎 弘道 (6)	●徳富 一敬 (2)	●林 歌子 (7)	●湯浅 新 (19)
●海老名 みや (5)	●小寺 菊子 (14)	●徳富 静子 (7)	●ハンナ・リアル (5)	●湯浅 初 (6)
●大石 順教 (15)	さ	●徳富 蘇峰 (7)	●兵藤(前畑)秀子 (18)	●横井 小楠 (2)
●大江女子学園 高等学校(21)	●斉藤 ちか子 (12)	●徳富 久子 (2)	●平塚 らいてう (14)	●横井 玉子 (5)
●大久保 音羽子 (6)	●斉藤 弔花 (12)	●徳富 蘆花 (9)	●平福 百穂 (12)	●横井 津世子 (2)
●大久保 真次郎 (6)	●斉藤 輝子 (13)	●飛松 甚吉 (5)	●深尾 須磨子 (15)	●与謝野 晶子 (12)
●大場 鈴子 (20)	●斉藤 茂吉 (13)	●鳥居 きみ子 (9)	●星野 立子 (18)	●与謝野 鉄幹 (10)
●大橋 万亀 (20)	●佐々木 信綱 (10)	●鳥居 龍蔵 (9)	●本多 庸一 (3)	●吉岡 弥生 (10)
●大山 セイ (20)	●佐々木 雪子 (10)	な		●吉屋 信子 (17)
	●佐々木 豊寿 (4)	●中河 幹子 (17)		